

PC-13 日本語のミラティブ標識「なんて」とその埋め込みについて

岡田 大和

要旨

「太郎が来るなんて！」のような文章に見られる、出来事・状態に対する驚きを表す日本語のミラティブ標識「なんて」は、「命題の叙実性」及び「話者にとっての意外性」の2点を含意していると分析されてきた (Sawada and Sawada 2019, 2021)。本稿ではまず、この意味的な定義づけが不十分であることを感嘆文との比較を通して示し、「なんて」が発話時ではなくミラティブの対象となる出来事・状態の知覚直後を参照すると主張する。次いで、「なんて」は感嘆文と異なり視点人物が統語的なコントロールによって決定されることを示し、「なんて」を Tenny (2006) の SentienceP の主要部として位置付ける分析を提示する。これにより、日本語では指定部に視点人物として pro を持つような投射は TP 内部 (Nishigauchi 2014) だけでなく、CP 領域のさらに上にも存在することを主張する。

1、導入

新しい・予想外の出来事や状態に対する驚きを含意する表現は「ミラティブ」表現と呼ばれ、DeLancey (1997) で独立の文法カテゴリとして分類されて以降多くの研究がなされてきた。本稿では日本語のミラティブ表現のうち、補文標識として現れる「なんて」に注目し、同じく命題に対する驚きを表現する感嘆文との比較を通してその性質を探る。この補文標識は Sawada and Sawada (2019) において初めてミラティブ標識として同定されたもので、以下のように出来事や状態を表す文の末尾について驚きを表現するものである。

- (1) (a) 太郎が来るなんて！
(b) 太郎がこんなに賢いなんて！

本稿の展開は次のとおりである。2節では、先行研究である Sawada and Sawada (2019, 2021) を概観する。次いで3節では、日本語の「なんて」に導かれる節が叙実動詞「知っている」の下の埋め込みに関して感嘆文と異なる振る舞いを示すことを示し、先行研究における意味的定義づけの問題点を指摘する。4節では、「なんて」の新たな意味的及び統語的分析を提示し、それが感嘆文との振る舞いの違いを説明できることを見る。5節は結論である。

2、先行研究の概観

先行研究である Sawada and Sawada (2019, 2021) は、「なんて」の意味を以下のように定式化している。

- (2) ある命題 p が定まって (SETTLED) おり、かつ話者が p を予期していなかったことを示す。
- (3) p が定まっているとは、(a) p が発話時 t0 において真であるか、(b) p が t0 に先行するある時間において真であるか、(c) p が t0 に後続するある時間において真である のいずれかを満たすことをいう。

すなわち、「なんて」の内部の命題は(i)叙実性をもち、(ii)話者にとって予想外である、という2つの条件を満たすことになる。(3)のテンスに関する条件は、(1a)のような文章において「太郎が来る」が「る」形をとるにもかかわらず過去の解釈を許すことを説明するためのもので、実際に(4)のように「なんて」文に対して過去形を用いた応答をすることは許容される。

(4) A「太郎が来るなんて！」

B「いや、それは何かの間違いだ。太郎は来なかったよ。」

通常の「る」形が述部に応じて発話時と同時もしくは未来の解釈を受けることを踏まえ、Sawada and Sawada (2019)は「なんて」の意味を(3)のように定義づけ、それが「時制を持たない命題 (non-tensed proposition)」と結びつくことによって過去の解釈が生まれてくるとした。「なんて」内部の命題は単体としては時制を持たず、それと結びつく「なんて」の側に(3)のような柔軟性があることで解釈の曖昧性が生まれてくるとしたのである。

(3)の条件は「なんて」の節が他の述部に埋め込まれた時にも機能する。例えば、(5)のように「驚きだ」の下に「なんて」の節を埋め込んだ時にも、埋め込まれた出来事は過去の解釈を持つ((4)におけるBの応答が(5)についても適切であることに注目されたい)。通常埋め込み文の「る」形は主文の時制を基準として、同時もしくは未来の解釈を受ける(従って、(6)において「来る」は主文の「言った」が指す時点をもとにする未来の解釈しか持たない)が、それに反して(5)の「来る」が過去解釈を受けるのは、「来る」の時制は(3)によって主節の時制と独立して定められるからである、というのがその主張である。

(5) 太郎が来るなんて驚きだ。

(6) メアリは太郎がパーティに来ると言った。

このような時制の解釈は、ミラティブの「なんて」をその他の「なんて」の用法と区別するための基準としてSawada and Sawada (2021)において採用されている。彼らが正しく指摘するように、「なんて」にはミラティブ表現としての用法のほか、命題への否定的評価を表す用法や、婉曲的に命題を表現する用法が存在するが、「る」形で過去の解釈を許すのはミラティブの用法のみである。このことは、(1)と驚きの要素を含まない以下のような例を比較すると明らかになる。

(7) a. (明日/*昨日) 誰が来るかなんてわからないよ。(婉曲)

b. この状況下では、辞めるなんて言えなかった。(否定的評価)

(7a)は昨日開かれたパーティの参加者を聞かれた時の返答としては不適切である。また、(7b)の「辞める」にも、すでに辞めたことをなかなか言い出せずにいる、というような解釈は存在しない。本稿でもこの基準を採用し、ミラティブの「なんて」とその他の「なんて」は(おそらくは文法化の結果生じた)別の語彙項目であるとして扱う。

3、感嘆文との比較

ここまで、日本語の「なんて」文の意味が(i)叙実性、(ii)話者の意外性、(iii)時制に関する柔軟

性、の3点から定義されることを見てきた。ところで、(i)および(ii)をミラティブ文と共有する他の文タイプとして、いわゆる wh 句を用いた感嘆文がある。wh 感嘆文が叙実性を持ち（大雑把に言えば、“How tall he is!”は“He is tall”が真であることを前提とする）、かつ形容詞の程度が話者の想定を超えていたことを意味する、という分析は、現在の感嘆文研究では定説となっている（Grimshaw 1979、Zanuttini and Portner 2003、Badan and Cheng 2015）。Grimshaw (1979)が述べているように、(8)で感嘆文が叙実動詞“know”の下には埋め込めるが、それを否定すると埋め込めなくなるのはこの叙実性によるものである。

(8) I (know/*don't know) how very tall John is.

したがって、もし「なんて」の定義づけが上の通りに行われるのであれば、感嘆文との違いは(iii)および、話者の意外性が命題全体にかかるか形容詞の程度のみにかかるかという点にのみある、ということになる。実際にこうした感嘆文とミラティブの橋渡しは Rett (2011)などの分析にも見られるのだが、上述した叙実動詞による埋め込みを日本語において感嘆文・「なんて」文双方についてテストをしてみると、少なくとも日本語に関してはその点のみに両者の相違を求める分析は妥当でないことが判明する。

- (9) a. 私はいかにメアリが背が高いか（知っている・??知らない・知らなかった）。
b. ジョンはいかにメアリが背が高いか（知っている・知らない・知らなかった）。
(10) a. 私はメアリが来るなんて（*知っている・*知らない・知らなかった）
b. ジョンはメアリが来るなんて（*知っている・*知らない・知らなかった）

(10)が示すように、叙実性があるにもかかわらず、「なんて」文は「知っている」の下にミラティブの解釈を保ったまま埋め込むことはできない（「知っている」と共起した場合「なんて」は話者による情報価値の軽視のようなニュアンスを帯びる。その場合、別のミラティブ標識である「とは」による「なんて」の置き換えが不可になることに注目されたい）。そして、(iii)の時制解釈の違いを考慮しても、この違いは説明できないどころかさらに謎めいたものとなる。というのも、「メアリが来るなんて知らなかった」のような発話は、例えばメアリが到着して話者が驚いてからしばらく時間が経ったのちに、話者が思い出したように行うことができるからである。このような時間差が許容され、かつ「来る」が発話時から見て過去の解釈を許すのであれば、「メアリが来るなんて知っている」も感嘆文同様「メアリが来たことは意外であったが、今はそのことを知っている」という解釈のもと容認可能であって然るべきであるが、実際にはそうになっていない。このことが説明を必要とする第一の相違点である。

第二の相違点として、感嘆文を「知らない」の下に埋め込む場合、主文の主語によって容認度が大きく異なるが、「なんて」文は主語にかかわらず埋め込むことができない。感嘆文の容認度の変化は英語においても観察される現象であり、Grimshaw (1979)は感嘆文が話者視点の叙実性を持つからだとしてこのことを説明している。すなわち、関連する命題が話者にとって真であれば良いのであって、それがジョンにとって真であるかどうかは問題にならないのである。翻って、「話者の意外性」の部分にも問題があるということになるが、これをどのように分析するかが第二の課題である。次節では、この二点に関する分析を提示する。

4、「なんて」の意味分析の修正および統語的位置に関する提案

「知っている」の埋め込み不可能性に関与していると思われるミラティブの特性に関して、Rett and Murray (2013)は重要な指摘を行っている。すなわち、ミラティブ表現が持つ一般的な傾向として、驚きの対象となる情報の知覚時と発話時の時間的間隔は短くなくてはならないというものである。このことは例えば、(11)の非文性を正しく予測する。“know”や日本語の「知っている」は知覚の継続を示す状態動詞であり、今この場で知ったばかりのことに対しては使用できない。

(11) #Wow, John won! I know that.

ただし、この制約を日本語に直接適用するわけにはいかない。日本語の「なんて」文は確かに多くは即時的ではあるが、前節で指摘したように過去を振り返るような形でも使用可能であり、このような場合発話時と情報の知覚時の時間的間隔は一定の長さを持つと言わざるを得ないからである。以上を踏まえて「知っている」による埋め込みの不可能性を導くために、ここでは以下のような「なんて」の意味的定義づけを提案する。

(12) 「なんて」は、視点人物が命題 p を知覚した直後の時点 t において、 p が真となる現実世界以外の可能世界が存在しないことを意味する。

(12)は叙実性および意外性を定式化したものであり、Cruschina & Bianchi (2021)においても類似の定義が提案されているが、様相基盤の参照時を発話時としないことによって、時間差のある「なんて」の発話も許容されることになる。

では、この定義によって「知っている」による埋め込みはどのように弾くことができるだろうか。ここでは、「埋め込み文内部の要素が主節述部の指す時点と異なる時点を参照点とすることはできない」という一般的な制約および(12)の定義から埋め込みの不可能性が導けると提案する。(6)で埋め込み文の「来る」が主文の「言った」の時点参照した未来の解釈を持つとしたが、これは埋め込み文のテンスが主文のテンスに統率されているとして分析できる (Kusumoto 2005)。

(13) メアリは[太郎がパーティに来る [ref.=t1]]と言った[t1:発話時以前]

このように、日本語では一般に埋め込み文の述部の時制は主文述部の指す時点参照点とする。このことが「なんて」にも拡張できるとした上で、以下の3つのケースを考察してみる。

(14) a. *[太郎が来るなんて [ref.=t1:知覚時の直後]]知っている [t1] (発話時=t1)

b. *[太郎が来るなんて [ref.=t1:知覚時の直後]]知っている [t2:発話時] (発話時=パーティから帰宅後)

c. [太郎が来るなんて [ref.=t1:知覚時の直後]]聞いていない [t1] (発話時=t1)

(12)の通り、「なんて」は知覚時の直後を参照点とする。(14a)のようにその時点が発話時と一致すればテンスに関する条件は満たされるが、この場合は「太郎が来る」ことは継続的な知識とみなされず非文となる。

次に、(14b)のように知覚時と発話時の間に時間的なギャップがあり、「知っている」の使用条件自体は満たされている場合だが、この場合は主文の参照点と「なんて」の参照点が異なるために非文となる。同じ現在形でも、例えば「聞いていない」のような述部には継続的な知識といった条件はないため、(14c)は発話時が知覚直後であれば容認可能な文となるのである。

以上のように「なんて」は(3)のように自身の埋め込む命題のテンスを決定するのみならず、(14)のようにより上位の動詞のテンスとも関わりを持つのであり、一見するとその統語的位置は TP 内部の投射の主要部を占めているとするのが妥当なように思える。しかし、(9)と(10)の2点目の相違点である「なんて」が話者視点を必ずしも含意しない点に関して「なんて」の統語的位置を考察してみると、この分析には問題が生じてくる。以下では、「なんて」の作る投射の性質を確認したのち、その問題点を指摘する。

(10b)において、(9b)では許容される「知らない」が許容されないという事実は、「なんて」の叙実性が話者ではなくジョン目線のものであることを示す。ここから導ける統語構造として、ここでは Nishigauchi (2014)の提案をいれ、「なんて」が自身の作る投射(POVP)の指定部に視点人物を指す PRO を持つ要素であると提案する。これを元に(10a)と(10b)の統語的表象を示すと以下のとおりである。

- (15) a. 私_iは[POVP PRO_i [CP メアリが来る]なんて]知らなかった。
 b. ジョン_iは[POVP PRO_i [CP メアリが来る]なんて]知らなかった。

(15a)、(15b)ともに PRO は主文の主語にコントロールされており、結果としてジョンを視点人物とした(12)の解釈が正しく成立することになる。問題はこのような視点に関する投射の位置であるが、これについてはさまざまな提案がなされてきた。Nishigauchi (2014)は Cinque (1995)の TP 内部にムードや証拠性などに関する要素を担う多くの投射があるとする提案に従い、その中の一部にこのような POVP は位置付けられるとしたが、一方 Speas and Tenny (2003)、Tenny (2006)などは CP 階層のさらに上に EvidP ないし SentienceP と呼ばれる、指定部に「文の真偽を評価・判断する、あるいはそれにコメントを加える」(Speas and Tenny 332) 人物を指す項をもつ投射を提案している。

(16) SAP > SentienceP > CP/IP

(Tenny's (42))

これとミラティブとの関連で興味深いのが Paul (2014)の中国語の文末に現れる小辞の分析で、以下のように話者および聞き手の態度を表す(17c)タイプのものは CP 領域の最上層に現れるとされている ((18)において、ba や le と ou が重複し、その順番が固定されていることに注目されたい)。

- (17) a. low C (おおむねアスペクトに関わるもの): le, láizhe, ne
 b. force (文タイプを決定): 疑問文を導く ma、命令文を導く ba など
 c. attitude (話者および聞き手の態度): 警告を表す ou、驚きを表す a など

(18) Bù zǎo l'ou [=le +ou]! Kuài zǒu b'ou [=ba+ou]!
 NEG early PART (fusion) fast go PART (fusion)
 "It's getting late! Hurry up and go!"

(Paul's (26))

Rizzi (1997)以降(19)のように ForceP は CP 領域の一番上を占めるとされてきたが、ForceP の主要部は (17b)の要素が担っていることを踏まえると、(18c)のような要素はそのさらに上位、すなわち SentienceP の主要部を占めると考えるのが妥当であろう。したがって、中国語の驚きを表す a と日本語の「なんて」が同じ位置を占めるのであれば、「なんて」も SentienceP を投射する、ということになる。

(19) ForceP > (TopP*) > FocP > (TopP*) > FinP

このように「なんて」の位置としては TP 内部と CP 外部の二つの可能性があるのだが、TP 分析の大きな問題として、以下のように「なんて」は「だ」と重なることがある。

(20) まさかこんなことになる(だ/*だった)なんて！

Sawada and Sawada (2021)は「早く来いだなんて！」のような例をあげてこの「だ」を直接引用の標識であるとしているが、(20)のような例は明確に発言の引用ではない。また、「だ」がコピュラであるとする分析も、「だった」に置き換えられないことから容易に否定される。これらを踏まえると、この「だ」は Hiraiwa and Ishikawa (2002)のいうように FocusP の主要部であり、「こんなことになる」全体が焦点解釈を受けているとする分析が最も妥当なように思われる。この事実は、「なんて」が CP よりも上位の階層にあるとすれば (19)の構造から容易に導けるが、TP 分析では問題となる。なお、(20)から導かれる条件を満たす位置としては SentienceP 以外に CP 内部の ForceP がある（この場合はミラティブ文を独立した一つの文タイプとみなすことになる）が、ForceP の指定部は一般に wh 移動などのターゲットとなるものであり、日本語のような wh-in-situ 言語においても空演算子の移動が提起されることもある。したがって、ForceP の指定部に視点人物の PRO が生成されるとする分析は典型的にきわめてアドホックな提案をすることになり、少なくとも積極的にこの提案を支持する根拠なくして支持できる分析とは言い難い。

以上から、「なんて」は日本語における SentienceP の主要部を占めると考えられ、「なんて」の存在はこのような投射が CP 領域のさらに上に存在するという分析に新たな根拠を与えるものであるといえる。ここから、(i)「なんて」は CP 階層のさらに上の階層を占めるにも関わらず、テンスに関してまるでモーダル表現のように主文のテンスと関わる、(ii)通常 CP のさらに上に仮定される投射は主節特有の現象を扱うためのものであったが、本稿の分析が正しければ少なくとも SentienceP は埋め込めるということになる、という2点の興味深い帰結が導ける。これらの事実を定式化した上で、テンスや CP の上位構造に関わる理論にアプローチしていくことが今後の課題である。

5、結論及び今後の展望

本稿では、日本語のミラティブ表現「なんて」の叙実動詞による埋め込みを主な題材として、「なんて」が驚きの対象となる命題の知覚直後に参照点を持つとする新たな意味的定義づけを行い、併せて「なんて」が日本語において明示的に現れる SentienceP の主要部であるとする統語的分析を提示した。こうしたミラティブ表現は近年注目され始めたばかりであるが、本稿で取り上げたように意味解釈・統語構造両面に関して興味深い振る舞いを示す。本稿では取り扱えなかった現象（例えば、「そんなことを言うなんて彼は無礼だ」のようないわゆる「判断の根拠」の用法）の分析や通言語的なミラティブ表現の比較を含め、さらに研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- Badan, L. & L. L-S Cheng. 2015. Exclamatives in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 24(4), 383–413.
- Cinque, G. 1995. *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Cruschina, S. & V. Bianchi. 2021. Mirative implicatures at the syntax-semantics interface: A surprising association and an unexpected move. In A. Trotzke, and X. Villalba (eds), *Expressive Meaning Across Linguistic Levels and Frameworks*, 86-107. Oxford: Oxford University Press.
- DeLancey, S. 1997. Mirativity: The grammatical marking of unexpected information. *Linguistic Typology* 1, 33–52.
- Grimshaw, J. 1979. Complement Selection and the Lexicon. *Linguistic Inquiry* 10(2), 279–326.
- Hiraiwa, K. & S. Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. In T. Ionin, H. Ko & A. Nevins (eds.), *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research* (MIT Working Papers in Linguistics 43), 35–54. Cambridge, MA: MITWPL.
- Kusumoto, K. 2005. On the quantification over times in natural language. *Natural Language Semantics* 13. 317–357.
- Nishigauchi, T. 2014. Reflexive binding: awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23, 157–206.
- Paul, W. 2014. Why particles are not particular: Sentence-final particles in Chinese as heads of a split CP. *Studia Linguistica* 68(1), 77–115.
- Rett, J. 2011. Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy* 34(5), 411–442.
- Rett, J. & S. E. Murray. 2013. A semantic account of mirative evidentials. In T. Snider (ed.), *Proceedings From Semantics and Linguistic Theory (SALT) 23*, 453–472. CLC Publications.
- Rizzi, L. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.), *Elements of Grammar*, 281–337. Dordrecht: Springer.
- Saito, M. 2013. Sentence Types and the Japanese Right Periphery. In G. Grewendorf & T. Zimmermann (ed.), *Discourse and Grammar: From Sentence Types to Lexical Categories* 147–176. Boston: De Gruyter Mouton.
- Sawada, O. & J. Sawada. 2019. The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with *nante/towa*. In *The proceedings of logic and engineering of natural language semantics (LENLS)* 16, 1–14.
- Sawada, O. & J. Sawada. 2021. Cross-linguistic variations in the interpretation of tense in mirative sentences: A view from Japanese mirative expressions *nante/towa*. In A. Trotzke and X. Villalba (eds.), *Expressive Meaning Across Linguistic Levels and Frameworks*, 216–247. Oxford: Oxford University Press.
- Speas, P. & C. Tenny. 2003. Configurational properties of point of view roles. In A. M. Di Sciullo (ed.), *Asymmetry in Grammar*, 315–344. Amsterdam: John Benjamins.
- Tenny, C. 2006. Evidentiality, experiencers, and the syntax of sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 245–288.
- Zanuttini, R & P. Portner. 2003. Exclamative clauses: At the syntax-semantics interface. *Language* 79(1), 39–81.